著・原　和規
イラスト・広瀬コウ

AJBRC文庫

魔女のマギーと魔法の鏡

この電子書籍はコミックマーケット 95 で
頒布したものを電子書籍用に再構成したものです。

AJBRC文庫

魔女のマギーと魔法の鏡

著・原　和規

もくじ

まえがき……3
一．あれ？校長先生は？……5
二．そこは本当に同じ世界？……13
三．どうすれば行ける？……19
四．戻れるの？……24
五．その後……30
あとがき……31

まえがき

みなさん、お元気ですか？

この度はＡＪＢＲＣ文庫『魔女のマギーと魔法の鏡』をお手に取っていただき本当にありがとうございます。これをご覧になられているという事は何とかこの『魔女のマギーシリーズ』第二巻が完成してみなさんのお手元にあるという事ですよね。

今回の作品は第一巻で予告した通り魔女のマギー達が学芸会の打ち合わせをしていると校長先生が消えてしまい・・・と言うお話です。

タイトルですが色々と悩みましたが取り敢えずこれで落ち着きました。

前作から一年。こうして新しいマギー達のお話を出させていただくことは本当にうれしいです。

そして本作に関わる方々がこの子達を気に入っていただけているというのもとてもうれしいです。

では次のページからマギー達の新たなお話し、スタートです。

一・あれ？校長先生は？

ねぇ、みんなは魔法ってあると思う？

私はあると思うな。だってこの世界には科学じゃとても説明できないふしぎな事がいっぱいあふれているんだもの。

それに私、魔女なんだ。魔女の私が魔法があるっていってるんだもの魔法は絶対ある。そうじゃなかったら私は何なの？

私の名前は、土岐真紀（どきまき）。小学五年生の女の子。友達の女の子からは『マギー』って呼ばれているんだ。でも男の子たちからは『ドギマギ』って言われている・・・私てっきり苗字と名前を縮（ちぢ）めて『ドギマギ』だと思っていたらいつもドギマギしているからなんだって。

うーん、えーと・・・まぁ確かにドギマギしてるしなー。私は『マギー』って呼ばれる

方が好きなんだ。だからみんなも『マギー』って呼んでね。

そうだ、私の住む世界のことをみんなに話さなきゃ。

みんなの世界では『魔法』ってないって言われているし『魔女』や『魔法使い』ってきっとそんなに多くないと思うんだ。

でも、それって中世ヨーロッパ時代に『魔女狩り』がされたからなの。

私の住む世界では魔法が使える人と使えない人がお互いのことを信頼して仲良くしていたおかげで『魔女狩り』がなかった。そのおかげで魔法がものすごく発達して『魔女』や『魔法使い』がたくさんいるんだ。

もちろん、みんなのように魔法を使えない人もいるんだけど、私たち『魔女』や『魔法使い』が魔法を使えない人に教えることでほとんどの人は魔法が使えるようになっちゃうの。

だから代々魔法を使う家系でなくても使える人が多いんだ。

その証拠に私のクラスの子はほとんどが魔法が使える。

っていっても実は私のクラスには私の他にもう二人魔女がいる。でもその子たちはついこの間まで魔女だってその子も私も知らなかったんだ。

私ちっとも知らなかったけど実は、その子のお母さん、お父さんも魔女だったんだって。でもある程度魔法が使えるようになるまで黙っていたほうが魔法が使えない子の気持ちがわかるからってずっと内緒にしていたんだって。

その子たちって言うのは私の親友の沙耶ちゃんと里奈ちゃん。

元々私が二人に魔法を教えていたからと言うのもあるけれど幼稚園の頃からの大、大、大親友！この前のトラックの事でさらに二人とは仲良くなった。前以上に二人と過ごすことが増えたんだ。

今、私たちは校長室で秋の学芸会について話している。

私たちの小学校では児童の自主性を尊重して学芸会でやる劇の内容はもちろん、どういった感じで進めるかなどかなりの事を児童が決めるんだ。

今日は校長室で校長先生と一緒に各クラスの劇の順番や衣装、大道具などの予算を話し

合ってる。
その話し合いの最中、私はふとあることに気付いた。
「あれ？校長先生は？」
私は二人に聞いた。すると沙耶ちゃんが「さぁ、お手洗いに行ったんじゃない？」と答えた。
「でも、ドアの開く音聞いた？それに私たちに黙って行かないと思うけど・・・」と私は言った。
「そうだね。おかしいね。」
里奈ちゃんが言う。
私たちはしばらくすれば戻って来ると思ってそのまま学芸会の打ち合わせを続けた。
でも・・・私が部屋の時計を見ると・・・
「二時！ねぇ、いくら何でも校長先生遅すぎない？」

私が校長先生がいないことに気付いたのが一時過ぎ。あれからもう一時間も経っていた。
「どうしたんだろう・・・」
里奈ちゃんがぽつりと言う。その時、部屋の電話が鳴った。
校長先生宛の電話だろう。私たちが勝手に出るわけにもいかない。どうしよう・・・
私たちが出ないでそのままにしていれば切れるだろうと思った。
　でも、電話はずっと鳴り続けている。
私は思い切って電話に出ることにした。
「はい。もしもし？校長室ですが。」
私は電話の相手に答えた。すると
「もしもし？土岐さん？君たちどこに行ってたの。突然いなくなるから心配したんだよ。」
電話の向こうからして来たのは校長先生の声だった。
驚く私。それを見て沙耶ちゃんが
「マギー。どうしたの？誰からの電話？」と聞いて来た。

「うん。校長先生からの電話なんだけど・・・」
そう言って困る私を見て里奈ちゃんが受話器を取り
「もしもし、校長先生ですか。今、どちらにいらっしゃるんでしょうか。」と言った。
「あぁ、神山さんか。いや、君たちが急にいなくなったんで学校中を探してたんだ。ひょっとしたら校長室に戻ってるかもって、今、職員室から電話しているんだよ。」
そうおっしゃった。
「校長先生、私たちずっと校長室にいます。校長先生が急にいなくなられて私たち心配していたんですよ。」と答えた。
「え？そうなの！わかった。じゃぁ、先生そっちに行くから待っていてもらえるかな。」
「わかりました。」
里奈ちゃんはそういうと電話を切った。
「校長先生なんだって？」
沙耶ちゃんが里奈ちゃんに聞いた。

「今からこっちにいらっしゃるって。」
「そう。」とだけ沙耶ちゃんは言う。
それから五分、十分、十五分と待っても校長先生は現れなかった。
「来ないね。」
私が言うと・・・
「そうだね。」と里奈ちゃん。
「あっ、そうだ。私、職員室に行ってくるから行き違いになるといけないから里奈ちゃんと沙耶ちゃんはここにいてくれる？」
「いいよ。」と沙耶ちゃんが言い「何かわかったら戻って来て。」と里奈ちゃんが言った。
私は二人を残し職員室へ。
『どう考えてもおかしい。』私は思った。だって、校長室から職員室までどんなにゆっくり歩いても五分もかからない。『何かが起きてる。』そんな気がした。
職員室に着くと私は先生に尋ねた。

「すみません、校長先生どちらに行かれたかわかりますか？」
「わからないわ。校長室にいらしたんじゃないの。」
「いえ、いらっしゃらないんです。」
「そう、どこに行かれたのかしら。」
私はふとあることを思い、こうも尋ねた。
「ところで校長先生が最後に職員室にいらっしゃったのはいつですか？」
「八時くらいかしら。それがどうしたの？」
「いえ、ありがとうございました。」
やっぱりと思った。私は急いで校長室に戻る。

ここまでお読みいただきありがとうございました。
もし気に入っていただけましたら続きは有料版を
お読みください。

作者